

金城学院大学「教職入門」（1年生以上）授業実践報告

長谷川，元洋
金城学院大学国際情報学部：教授

<https://hdl.handle.net/2324/4822587>

出版情報：オンライン授業の地平：2020年度の実践報告，pp.84-84，2021-04-30. 雷音学術出版
バージョン：
権利関係：Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives International

1. 授業の目的と概要、授業内容、成績評価の方法等

本授業の目的は、「(1)教師に必要な資質・能力について理解することができる。(2)現在の学校を取り巻く様々な問題について学校、地域、保護者が連携することの必要性や日本の教育制度の特徴等を理解することができる。(3)教職の魅力と責任について理解することができる。」の3つである。

授業内容は、「教師に必要な資質・能力」、「学校が直面する問題」、「教育の情報化」、「教育基本法」、「学習指導要領」等、日本の教育に関する内容を幅広く取り上げている。

2019年度より、教育基本法や文部科学省の資料等を題材にし、「質問駆動型学習」(QDL: Question Driven Learning) (Stokhof, H. 2018)(佐藤 2018)の手法を参考にした、グループで「問い」を立てて、探究的に学習するスタイルを採用している。2020年度は、オンラインで授業を行うこととなったが、対面授業と同じ効果を得られるよう、質問駆動型学習をオンラインで行い、アクティブ・ラーニング型授業となるように工夫した。

12回のリアルタイム型授業授業では、グループでの話し合い、Google スプレッドシートを使ってそれぞれが考えた「問い」の共有、Google スライドを使った発表資料の共同制作等を行わせた。Google Meetで11のミーティングルームを開設し、学生は全体のミーティングルームとグループ別ミーティングルームの両方にログインした状態でグループワークを行わせ、筆者は、複数台のPCで11のミーティングルームをモニターするようにした。どのグループも活発に対話しながら学習を進めていた。

オンデマンド型授業では、KJ法を紹介したり、付箋に書き出した問いから文章を作る方法を紹介したりした上で、PISAの学力調査の結果を題材にして考察させた。レポート提出時には、考察時に付箋に描き出した問いや考えを構造化した図の写真や、文章の構想図の写真も添付させた。それによって、アクティブ・ラーニング型の授業とすることができた。

評価は、論作文レポート(3本)90%、毎回の授業の振り返り10%で行った。なお、筆記テストは取り止めた。

2. 今後の課題・可能性、もしくは受講生の反応等

受講学生56名中47名が1年生であったためか、グループで話し合う機会があったことへの評価が非常に高かった。大学に入学しても大学のキャンパスに足を踏み入れることができない状況だった2020年度入学生にとって、オンライン上であっても他者とともに学べる環境は大切なものとなっていたようである。また、「問いを立てて探究的に考える方法」「問いを使って考察したことを文章化する方法」等を採用したことは、学生が能動的に学ぶ授業とするために効果的であった。

<引用文献>

Stokhof, H. (2018). How to guide effective student questioning? Design and evaluation of a principle-based scenario for teacher guidance. Open Universiteit.

佐藤 賢一(2018),「ハテナソン：質問駆動型学習の設計・運営と成果・課題：生命科学専門教育科目における実践と調査」, 高等教育フォーラム, 8巻, 41-58